

有識者ヒアリング（岸井教授〔分野：まちづくり〕） 議事録

日 時：令和2年（2020年）12月22日（火）11時00分～12時00分

参加者：（有識者）一般財団法人 計量計画研究所 代表理事

日本大学 理工学部 特任教授

岸井 隆幸

（熊本市）市長 大西 一史

副市長 多野 春光、副市長 中村 賢

政策局長 田中 俊実、危機管理監 紫垣 正刀、総務局長 深水 政彦、

財政局長 田中 陽礼、文化市民局長 井上 学、経済観光局長 田上 聖子、

都市建設局長 田中 隆臣、中央区長 横田 健一

方 式：リモート会議

1. 挨拶（大西市長）

今日は、お忙しい中お時間とっていただき感謝申し上げます。

岸井先生は、熊本駅周辺地域のまちづくり推進協議会、並びに都市空間デザイン会議にも、様々な形でお力添えをいただいております改めて感謝を申し上げます次第である。

今、御承知のとおり、この熊本市役所の本庁舎の建替えについて色々な議論をしているところである。平成29年度に、この庁舎については耐震性能調査を行ったが、現行の建築基準法等が求める耐震性能を有していないということが判明した。

そのあと議会でも色々ご議論いただく中で、専門家の方から地下の連続壁や杭の精査をするべきとご意見があったことから2回目の調査を行ったところであるが、今回も耐震性能を有していないということが明らかになったところである。

そうした中、新型コロナウイルスの影響もあり、今、市議会の議論については一旦中断をさせていただいているところである。

我々としては2度の耐震性能調査で厳しい結果が示されたことは大変重く受けとめており、内部的にこの本庁舎の在り方については、待ったなしの課題であること、また、庁舎自体が老朽化をしているということも踏まえると、熊本地震を経験した中で、本庁舎のリスクを適切に評価して、その上で行政の責務として最悪の事態に備える必要があると考えている。同時にこの市庁舎というのは市民の皆様へ行政サービスを提供していく上で非常に大事な拠点でもあり、まちなかの一等地に建っているのも、そういう意味ではまちづくりにおいても非常に大きな影響を与えるものであると思っている。

そこで今日、岸井先生には、まちづくりの専門家としての観点から、現庁舎の活用、現庁舎の建替えについてどういうふうにあるべきか、あるいは、都市計画など色々な視点から考えをお聞かせいただきたいと思っている。

2. 有識者からの御意見・御提案

■岸井教授

私がお話を伺って感じたことを3点にまとめてお話をしたいと思う。（提供資料を画面共有）

一つは言うまでもないが、今回の市役所の建替えがもし実現するとすれば、これから少なくとも70年ぐらいは使うことになり、まちづくりにとっては大変大きな影響がある。まちづくりの

長期的なビジョンにつながるようなプロジェクトであっていただきたいと思っている。

先ほど市長からも話があったが、立地がとてもすばらしく、ここへきて桜町の開発が進んできて、桜町からお城へ入っていく方もいらっしゃるわけだが、同じ道を帰ることなく、違うところからでてくるといのは当然ありうる話で、さらにいうと、桜町からサンロード新市街そして下通りという大きなまちの中の回遊動線ができ上がりつつあるという気がするので、お城と街との接点であるこの場所は、とても大事な場所だと思う。これからの長い目で見たまちづくりにしっかりと役に立つようなプロジェクトにしていきたいと感じているところ。これは極めて当たり前といえれば当たり前のことである。

2点目は、周辺部との関係。「本庁舎等整備に関する基本構想」の中で色々と庁舎の位置等も考えられていて、それぞれメリットデメリットの評価がされている。私としてはまだ理解が及んでいない部分があって、例えば白川公園に移った際に白川公園の残った部分と新しい庁舎との関係をどのように考えるのか、また現庁舎が仮に部分建替えもしくは移転して動いた場合には、跡地が当然生まれてくるが、跡地をどう使うかということと一体的に考えないと、最終的にいいものになっていかないと感じている。

仮にこの場所で建替えが行われるとしても、市営駐車場敷地と本庁舎を一つの敷地として考えられていて、議会棟の方は取外されて外されているようだが、そこは手をつけないという意味なのか、あるいは、案の中には一部議会のスペースも書いてあったので、そうではなくて何か別の意図を持ってそういうふうになっているのか読みとれない部分があった。

市役所の市営駐車場に関しては、民間の土地が3分の1程あるとのことなのでなかなか簡単ではないと思うが、それであれば土地をうまく集約しながら、議会棟の方まで少し広げてもいいのにと思いながら拝見していた。加えて言うならば、この部分で、再整備が行われるとすれば、当然その市営駐車場が約300台分消えるわけで、これ自身は市街地全体の駐車場の計画を拝見すると、長期的には少し減らしてもいいのではないかという風な数字になっているから、建て替えていって適正な規模にするというのも当然あると思って見ていたが、一方で、白川公園の方に移るとやや公共交通機関の便が悪くなると思うので車利用についてもしっかりとした対応がいるのではないかと。ただその部分についてはあまり触れられてなく、どういった駐車場を整備すべきかについて、議論が無いまま庁舎の話がでてくる。白川公園に建て替えれば恐らく駐車場がそれなりの数いるわけなので、その整備についての費用も当然確保することが必要で、公共交通機関の利便性の高いエリアにある施設とそうじゃない施設については必ず対応も異なるということではないかと考えている。

なお、提出したメモにある「周辺部」という意味は、跡地隣接部という意味だけではない。仮に駐車場に何らかの形で手を付けるとするならば、中心市街地全体の駐車場の計画に沿ったものにしていく必要がある。今回のプロジェクトの中で取り扱う駐車場の具体的なイメージをもう少し語らなければいけないと感じている。

ここからは、行政の方は多分言いづらいのだろうと思うが、私が見た限りにおいては、現在の議会棟の面積はかなりリッチであると感じている。他の地域の政令市の議会棟の面積や市議会議員の数と比較しても大きいとされていて、その辺は、客観的な資料を基にしっかりと議論をしていただきたい。限られたスペースだから、議会棟の会議室の使い方についても当然のことながら、しっかりとしたマネジメントのもとで、みんなで共有するという仕掛けが必要なのではないか。現在どういった施設がどの位使われているのかということについて、しっかりとしたチェックをした上で、将来的な規模について検討するのが適切である。

それから3点目は、次の時代をけん引する自治のシンボルたる市役所像。これはなかなか難し

く、将来どんなことが起きるかは誰にもわからない。ただ、今回のコロナでもそうだったが、デジタルの社会がより一層進むだろうということは誰しも感じているところである。20世紀後半から産業革命が起きて都市部に大きな工場が立地をすることとなった。そこを目指して農村から多くの人が集まってきて都市は膨張していくわけだが、結果として上下水道が整備されていない、あるいは石炭を使う煙が十分処理出来てないということで都心部は環境としてはよくないということになって、同時に郊外部に鉄道が生まれてきて、人々の住宅は郊外に移っていくということが起き、20世紀のライフスタイルは郊外の住宅と都心の業務という感じだったと思う。しかし、今東京でも、富士山が見え、青空が広がっていて、過去100年前のような工場のイメージとは大分異なるものが、都市の中で生まれてきている。

こうした結果、再度少しずつ職と住の融合が進んでくるのだろうと思うが、それを加速化したのが今回のコロナであった。リモートワークの推進で、従来の活動がウェブに転換できるということがはっきり見えたわけで、そういう意味ではデジタルを活用して職と住の融合がさらに進むということが当然ある。それに対応するような働き方というの生まれてくるわけで、将来の市役所の職員がどういう働き方をするかもよく考えながら議論しなければいけないと思った。

リモートが進むと、従来の労働者1人当たりの面積はいらない、オフィス床はもっと減るのではという話もあるが、必ずしもそうはならないと思う。今まで我々が使っているスペースの原単位は必ずしも十分な広さではない。フリーアドレスが進んだとしても、リモートワークが仮に行われたとしても、オフィスとしての面積は減らない。さらに言うと、オフィスというのは一体何だったのかと問われるようなことでもあると思っていて、今までは自分の机、あなたの机が並んでいるのがオフィスというイメージがあるが、実はオフィスというのはそのような機能ではなかったのではないかと。つまり、みんなが集まってきて情報交換や意見交換をする、お互いのバックグラウンドを理解した上で同じ方向に向かって進んでいく。

特に企業の場合には、企業活動を通じて、皆さんが自分たちの生活の糧をえるということなどを共同してやっているということなので、そのことを意識し合い、さらに言うならば、みんなが何を考えて、どちらの方向に進もうとしているのか、風を感じるようなそういう場所が多分オフィスのリアルな空間の意味だと思う。

つまり、会議する場所や普段みんながくつろいでいる空間が大事であり、この先市役所はどうなるかは言いづらいが、いろんな市民がきて、いろんな活動がある中で、さまざまな交流をする場所が大事になってくるのではないかと。特に高齢社会になればなるほど、社会との接点を持つということが大事で、それは先ほどのオフィス概念の延長線上の中にあると思っている。

つまり、メモの中に「参加」と書いたが、社会に参画をする、社会とつながりを持っているということがとても大事な時代になってくると思うので、そのマッチングなどさまざまなチャンスを提供する場が社会として必要。大都市だとそれを鉄道会社などがビジネスの一環として、一生懸命、沿線の価値を上げるためにやるわけだが、大都市以外では、やはり行政の役割がかなり大きいのだろうと思う。熊本は政令市なので、大都市の一部と思えば、そんなに市ががんばらなくてもいいということもわからないが、一方で、民間企業にどれぐらいの期待をよせることができるかと思うと、市が一定の力を持つことが必要ではないか、つまり市役所というのは、一体何だったのかということについて考えてみる必要があると思う。今までのような機能の積み上げだけで本当にいいのかということである。

なお、そうは言っても市役所を70年ぐらいもたせるとすれば、社会はますます変わるので、その社会の変化に対応できるような、柔軟な市役所の空間であることが必要。長期の変化に耐えられるような仕組みをどうやって空間として担保していくかということも実際の市役所を考え

る、建設を考える上ではとても大事だと思う。

さらに言うと最後は「象徴性」で、高いところに熊本を象徴するような大きなお城があり、一方で足元のところに市民の象徴である市役所が存在している構造が、この場所の特徴で、とても強い力を持っている都市だと思う。仮にほかの地域に移転するとすれば、どういったものを今の場所に置くのかという先ほどの跡地の取扱いの議論にもつながるわけだが、市役所が変わるべき象徴性を持つものが何か、移転したとしても市役所は同じような象徴性を持ちうるのかについては議論が必要だと思っている。いろんな手法があって、民間の力を借りてなるべく初期投資を少なくすることを考える自治体も東京などでは結構多く、区役所も民間の建替えの中に席を置いている場合もあるが、長期的な視点でみた場合、いわゆる再開発的な土地の権利あるいは他の方たちとの共有という形がうまく回していけるのかという議論は、いろんな区役所の建替えの場合もあった。最初がいいが、永続的にその建て替えを担保していくというその先のことを考えると、少し仕掛けがないと危ない。さらに言うと、そこにおける象徴性は一体何なのかということで民間の力を借りてつくったビル、それはそれで結構だと思うが、みんなが本来使うべき市役所としてのイメージや市役所が持つべき機能などを第一義に考えるべきだと思う。具体的にどんな場所でどんなことをすれば一番よいのか判断する材料を正直持ち合わせていないが、今のような3つの場所を想定しながらいろんな議論を重ねていくときには、少なくとも例えば白川公園であれば白川公園の東側の部分とはどういう関係を保つのか、市営駐車場敷地であれば、現在の議会棟の敷地のところとはどういう関係を保つのか、こういったことが同時に語られるべきではないか。その中に、メモの3番目にあるシンボルたる新しい市役所の形が何か見えてくるといいと思っている。今、お城が大変な状況でようやく新しいルートなども出来て、少しずつ元に戻りかけているが、次の時代にお城が多くの方を魅了することは間違いないので、その魅了するお城の足元にある空間は、市民が誇れるものであるべきであり、仮に市役所ではなくてもそこに建つ物はそういうものであるべきだと思う。財政面の話を私は全てを承知しているわけではなく、なかなか厳しいという話もあるかもしれないが、ただ50年、70年つづくその大きな一歩をここで議論するわけなので、次の時代に恥じないようなものにしなければならないと感じている。取りあえず第一印象を私の方からのお話をさせていただいた。また議論があれば、重ねて進めていきたいと思うのでよろしく願います。

3. 意見交換

○大西市長

我々が直面している新型コロナウイルスがある中、大きな財源が必要な中、先行きが見えない中で庁舎をこのまま維持していくのか、建て替えるのか相当シビアな議論をしてきたところ。現在は議会での議論を中断しているが、内部的には考え方を詰めていかなければならない。この建物自体がすでに老朽化していて、設備自体の大規模な改修もこれまで40年近くたっているが一度も行っていない。それから現行の建築基準法等が求める耐震性能を有していない状況で、耐震補強するのも難しいというような状況を踏まえると、私はやはり庁舎を維持していくのは難しいと思うが、先生からご覧になって、どういうふうと考えられるのか率直にお伺いしたい。

■岸井教授

私自身は建替えを前提にした議論をしている。ハザードマップを確認しても最近の災害の激甚化を考えても建て替えることはいつかやってくるので、この時期にしっかりとしたものにするのが妥当だと考えている。財政面の話をちゃんと理解しているわけではないので、お金が足りな

いとか、今の時期だと他のことに費用がかかっているから無理だというようなことがあるとすれば、判断は時間的にずれるかもしれないが、長期的なことを考えれば、現状のまま使いこなし続けて、うまくいくとは思っていない。

○大西市長

議会の中でも意見が分かれており、先生がおっしゃられた今後50年、70年使い続ける庁舎をもし考える場合には、建替えに関して相当真剣に考えなくてはいけない。また、有利な合併推進事業債を使う場合、時間的にも限られている状況で判断をしていかななくてはならない、2回の地震に耐えたから大丈夫ではないかという意見も議会ではあるが、先ほど別の専門家の方にお伺いしたところ、老朽化をしていて、2回の地震のダメージを受けている場合には、それだから大丈夫だと考えるのは厳しいのではないかとのご意見もあった。そういった観点からこの建物を維持していくことのコストと新しく建て替えるコストをどのように考えればよいかを教えてください。

■岸井教授

私自身は先ほど話したとおり、今の庁舎は多少手を加えてもそれなりの費用がかかるというのがこの報告書で出ているので、ちょっと手を加えて改善されるのであれば、そういう選択肢もあると思ったが、かかる額がかなりの額であるということを考えると、ここは決断をすべきだと思っている。これからいろんなことが起きてくるので、全てのことは読み切れないというのはもちろんだが、着実にデジタル化が進んでくるし、着実に今の気候変動の中で災害は激甚化してくるので、市役所が先頭をきって次の時代を引っ張っていくことが必要と思う。場所がすごいところにあり、もしうまくやれば、まち全体の次のステップにつながっていくプロセスになると逆に期待をするところ。

○大西市長

建替えの問題は先生の今の意見を聞くと、新しいプロジェクトとして建て替えた方がよいのではないかというご意見。一方で、この場所の話でいうと、熊本城前の最高の立地、一等地であるので、そこをどう生かすかということがある。スペースとして、他の専門家の方は、まちの中心にあることはシティホールということでもあるので重要ではないかとおっしゃっている。一方で、本庁舎機能自体を見れば、そんなに人が集まるということではなく、区役所が便利な場所にあればいいとか、そういうふうに考えた方がいいのではないか。そうなる民間のいろいろなご意見、サウンディングをして、いいアイデアを出したらどうかというような話がある。先ほど先生の話の中では、必ずしも公民連携の中で、ベストプラクティスかどうかはいろいろな検討が必要という話があったが、市役所の立地を考えたときに、民間からもいろいろな意見、提案をいただいて、アイデアをいただくことは、市民負担を減らすという意味で、あるいは、場所のポテンシャル、土地の価値を高めていくためにプラスだと思う。その辺についてアドバイスをお願いします。

■岸井教授

立地としてはすばらしいところなので、いろんな可能性があると思う。ただ全体の熊本のまちの構造を考えると、桜町の再開発ができて上がって、そこに大きな広場と新しいスペースが出てきて、お城にしっかりと入るゲートが出来上がる。

そういう中、地域との関係においては、サンロードや下通が軸になることは間違いがないと思

う。その状況で、何か新しい商業的な機能を別なところに置くことが妥当かという私はそうではないという気がする。

もちろん熊本城から出てくるまちとの接点のところがまさにあの場所なので、そこにおもてなしの機能があることについては、とても良いことだとは思う。今はちょうど出たところで、樹木が前面にあって、少し議会棟が低めになっていて、割とまちとお城が馴染んでくるような設えになっているが、仮にあまり頑張り過ぎると、今までの熊本城のもっている価値が、毀損されないかということに懸念する。あの部分のデザインはかなり慎重にやらないと、色んなものを詰め込んだら、動くとは思いますが、それが本当に良いのかどうかは、私はちょっと考える。

○大西市長

そこが先生がおっしゃっている象徴性ということなのかと思う。必ずしもこの再開発をドンドンやって、例えば商業施設やマンションを建てたり、そういうことばかりが良いことではなくて、そういう都市の景観、熊本城とつながっていること。そして、そこにあることを十分、空間としても利用して、心地よい、そして未来につないでいく空間が必要だと理解した。

■岸井教授

必ずしも高い建物を作ることが、都市の発展ではないと思うので、しっかりとした熊本らしいものにしなければならない。

○大西市長

そうなる、例えば市役所の駐車場も含めたスペースや、花畑別館の敷地もある。そういうことをよく考えながら、例えば庁舎機能の分散配置も検討すべきではないかという議論が市議会の方からあっているが、そういうことについてご見解があれば伺いたい。

■岸井教授

長岡市がそれをやった。機能をまちなかに分散して、市議会はまちの人にとって1番目につく1階の部分にわかるように配置している。小さな町であれば、市役所の機能というのは、かなりのパワーである。まちの中で市役所に関連する人々が動き回るそのパワーをまちに波及させたいという気持ちはよくわかる。では、熊本において長岡市のように分散させるべきかということとそこまでのことはどうかと思う。

趣旨はむしろ、白川公園を選択されるのであれば新しく作って移るので問題ないが、現庁舎をやりくりしながら移転するならば、プロセスをもう少しちゃんと考えていかなければならない。どう移していくのか、それも描いたプランでないと、逆に破綻する気がする。

幾つか使える場所が先行的にあるとするならば、そういうところを使うことによって、どういう機能を順番に移していったら、どういう建替えができるのか、もちろん一気に全部潰して、それを新しく作るという選択肢もあるが、そのときにはその機能を一度どこかに移さなければならない。これは結構大きな問題で、それをうまく実現するのは厳しいかなと思っている。建替えをすすれば、移転をしながら連続的にまちが変わっていくということになるのかなと思う。

○大西市長

先生のイメージは、段階的に移転するということか。そういうことを実現するためには民間のデベロッパー等から話を聞いていくということはあるのか。

■岸井教授

それは問題ない。むしろ彼らは彼らでノウハウを持っているので、例えば花畑別館のところは多少、今の計画であれば容積があるので、そういうものも含めてどう回せば1番効率が良いか知恵をもらうことは問題ない。つまり、建物の機能を維持しないといけないので、僕も全部理解していないが、現在のこの建物について供給処理関係についてはどうでき上がっていて、どの部分は先に移すことができるけど、ここは難しいとか条件があるのかどうか。その辺については実際に建築の設備・施工の専門家の力も借りなければならぬし、同時にもテナントを呼んでくることも考えれば、マーケティングの力もなければならぬ。市役所だけでは、ちょっとづらい。そういう専門家の知恵を借りるのは全く問題ない。

○大西市長

例えば、東京あたりでは大丸有の再開発、あるいは横浜市庁舎の跡地利用にも先生は関わっておられるが、今、先ほどのご指摘の中でも、オフィススペースが現状で十分ではない、例えばフリーアドレスであるとか、そういうことをやるにしても、一定程度集約するにしてもスペースは確保すべきだという話があったが、今、東京や横浜市の庁舎であるとか、先日横浜市役所の庁舎を見せていただいたが、執務スペースと一般の市民が入るスペースは広々としていたりして、必ずしも省スペースだけという考え方だけではなくて、多様に使えるような形にしてあると感じた。今後、この庁舎を再開発も含めて整備していく中で、そういうスペースの在り方、スペースデザインをどう考えていけばいいか、お話をお聞かせ願いたい。

■岸井教授

東京はリモートワークが地方より少し多めにやっている事実があるが、やっているのは結局大企業と業種でいえばIT系だとか、職種で言えば、管理職だとか技術者、そこが比較的高い。なかなかやれない職種、業種もある中で、リモートワークをやるグループが比較的多い所においては、床のニーズが少し縮まるのではないかとやっている方はいる。今、ウィズコロナの時代だから、その先は分からないが、実際やっているリモートワークの方の意見を聞くにつけ、やはりウェブで出来ることと、出来ないことがあることが分かってきた。

こういうふうに単に意見交換、情報交換をするということはできる。あるいは市長が情報を発信することもできる。では意思決定ができるかと言ったら、今日は皆さんと私が1対多数だが、同じスペースにしながら、皆さんが何を考えているかを理解しながら、次の方向を決めていくという意思決定の仕組みだとウェブだけではなかなかかゆいところに手が届かないという感じがある。そうするとやはり1週間に1度や2度は会社に出ていくということは、僕はある意味では正しい方法だと思う。家にいて1週間2週間会社に行かなくて済むような仕事というのは、フリーランスの人は別だが、将来的にはAIにとって代わられてもおかしくないと思う。1週間に1度は会合に出て、意思決定の中に参画しながら働くということが働くことの意味だと思うし、みんなが求めているものだと思う。したがって今のような新しい変化が生まれてきても、結局はミーティングをすとか、みんなで思いを交換をするということに関しては、リアルの中の価値はもっと高くなると僕は思っている。

冗談半分であるが、皆さんフェイスブックを使っているが、フェイスブックという会社の意思決定は絶対フェイスブックでは行われない。ザッカーバーグの近くで行われている。そこはやはり変わらないと思う。ただ確かに、必ずしも会社の机に座らなくてもできることはあるわけで、

1週間に1度話し合っって持って帰ってやるというふうな働き方が増える気もする。あるいは近くの区役所で少し仕事をやるとか。そんなことは当然できるので、いくつかリモートの仕事ができる場所というのが各市に広がってくるだろうと思うし、それを使いこなす技術は我々も段々身についてくると思う。職と住が近づくことは着実に進んでいくと思う。

ただ、今までのオフィスが大きく減るとか、そんなことにはならないと思っている。熊本に当てはまるかはわからないが、東京で言うと、今1番いいオフィスは空いたところで必ず埋まる。何が最後空くかという、老朽化している中小ビルのWi-Fi環境の悪いところが空く。そのビルを持っているオーナーは、実は建て替えたいと思っている。だから、テナントがいらっしゃると出来ない、むしろ空いたほうがいいと思っている方が結構いらっしゃる。

中小ビルの建替えが始まるという可能性がある。耐震補強しなければいけないような中小ビルがまちなかにいっぱいあるわけだが、テナントが出ていかないとオーナーは建替えを申し出ることができない。そういう状況の中で、建替えのある種のチャンスが訪れるかもわからない。ただし、同じビルを建てても埋まるかどうかかわからないため、より住に近い機能とかが入ってくる可能性は高いと思う。

○大西市長

先ほどデジタル、参加、永続性、象徴性と先生がおっしゃったが、ハイブリッドという変だが、例えば意思決定したり、ミーティングをして合意形成を図っていくようなことについての場として、そういうスペースをきちんと確保する必要がある。例えば議会もそうだし、それ以外でも色んなミーティングを熊本市役所でやるので、WEBでももちろん出来つつ、人が集まる機能がこの中心市街地にあるということは、市民の皆さんにとってもいい場所になると先生の話聞きながら思った。そういう理解でいいか。

■岸井教授

私は市民の皆さんも、高齢化が進んでくる中で、公共交通があればまちへ出ていける、公共交通の利便性が高いところで、まちへ出ていくきっかけがあれば社会との接点を持てる、それがないとつまらないと思う。社会との接点が欲しい、我々が生きているということの価値をみんなに認めてもらいたいと思う。だが、今までとまったく同じ仕事をその場所でやる気もないわけである。小さくてもいい、別にそんなに儲からない、でも社会の役に立つことができるはずだと、そういうことを誰かがどこかでマッチングさせないといけない。あるいは、そこに行けば誰かに会えて自分で何かを探せるかもしれない。そういう機能は恐らくますます必要になるような気がしていて、それを民間の方たちがやってくれそうな大都市もあるが、地方都市においてそういう民間の企業がどこまで頑張ってくれかということを見ると、特に小さな自治体になるほど、市という行政の力はとても大事だと思う。熊本市は政令市としてかなり大きな市であるため何とも言えないが。そういう場所が、あるいはチャンスがあれば皆がとりあえず行ってみようかなと思ひ、まちなかを歩きそれが健康につながるなど、良い方向が見えてくる。社会とのつながりがとても大事だと思う。

○大西市長

市役所の一つの機能として社会との接点をしっかり作っていくということがあると思う。あとは区役所と本庁舎の機能をどういう風に考えるかがある。

○多野副市長

基本構想の中で、いわゆる、花畑地区の別館跡地、それから本庁舎裏の駐車場、そして白川公園。3カ所を我々が選んだ理由としては、市役所を建て替えるにあたって、現実性がある場所として、この3カ所の組み合わせを考えた。そうは言いながら、中心部エリアから離れたエリアに区役所は持って行かないが、思い切って、本庁舎を持って行って、そこを核とした新たなまちづくりを進めながら、跡地には先生が仰ったような、商業性のある施設というものを民間でつくっていただくという選択肢もあるのではないかと思います。ただ、手取本町1の1と言われた場所に、民間に、経済性のことも考えて、本庁舎は機能だけを求めて違う所のまちづくりの核になるというような考え方でよいのかという意見もある。新しいまちづくりについてどのように考えられるか。

■岸井教授

移る場所がいいところである、というところがもちろん大前提。例えば、石川県の場合、県庁と市役所が兼六園の前にあった。県庁は石川県という能登半島を抱えていることを鑑みて、より広域的な利便性の高い駅の西側に、高速道路があるほうに移転した。市役所はまだ移転していない。市役所の脇にあった小学校が廃校になっていて、ここに21世紀美術館を作った。それが当たった。兼六園という歴史的な名園と、そこから街へ出てくるところに新しい、魅力的な象徴的なものをつくった。そういうシナリオがないとは言わない。

今回のこの場所において、何が本当にふさわしいのか。結構広い。これだけでもかなりのものが入る。まちの接点のこの場所に何がふさわしいのかというのは知恵の出し方がいる。みんながこれだねというのがもし見つかるとすれば、市役所が外へ行っても、それに耐えられるだけの、政令市でもあるので、力はあると思う。小さな自治体だと僕は無理だと思う。そこにあった市役所が消えてしまうと町が全部消えてしまうぐらい影響が大きい。政令市の中で、これだけの繁栄を誇っている中で、もしその変わるべきものが、みんなこれならばと思うものが本当に見つければ、遠くに行くこともあると思う。今の状況の中で、それはとても判断が難しい。なんだったら本当にいいのかというのはちょっと難しい。度々言っているように市役所が現在地でもおかしくないと思っているので、市役所の機能というのが何なのかという問題はあるが、シンボルが現在地にあってもおかしくないと思っている。

○中村副市長

先生が仰った長期的なビジョンについて、熊本市も、これから先、人口が減少・高齢化していくことが予想されている。庁舎についても、市民の利便性という観点から、公共交通サービスの高い所ということがあると思うが、先のことを考えた時に、市民の利便性という観点だけでなく、公共交通サービスを維持していくという観点からも、現時点で公共交通サービスの高い所に移転することも考えられるのではないかと思います。

■岸井教授

おっしゃるとおりで、公共交通の利便性を保つことがとても大事。それを軸にして、いろんなことを考えていく。高齢者が増えてくると最後は運転が出来なくなる。やはり自分の力でまちへ出てくることを考えると、公共交通がとても大事になる。その公共交通の近くに様々な施設を立地させたい。結果として、公共交通も経営ができるし、市民も利便性が増すというのが、Win-Winになる関係だと思うが、それを立地適正化計画とかで何とかやろうと考えていらっしゃると思う。

私自身はそのことは間違っていないと思う。将来の人口構成や総数を考えても、公共交通をしっかりと保てるよう、公共交通を軸にしたまちづくりを積極的に行うべきである。その周辺に公共施設を、むしろ計画的に立地させるべきだと思う。

○田中政策局長

市庁舎は2,700人を超す職員が勤める、このエリア最大の事業所である。仮に庁舎が移転をしたとした場合、区役所が残ったとしても、跡地の利活用方法について、人の流れが変わるとか、跡地に入ってきたところによっては競合するとか、周辺の商業地域などから不満や反対の声が出てくるのではないかとと思う。そういった場合、こういったプロセスで話を進めていけばいいのか、まちづくりの観点から、他都市の成功事例などがあれば教えていただけないか。

■岸井教授

先ほど、石川県庁は移った。結果として、駅前周辺のほうが今、賑わっている。いい悪いはいろいろあるが、先ほど市長がおっしゃった横浜も実はそのことを抱えていた。横浜の関内という駅の目の前、市役所はとても便利な所にあった。ただし、狭くて、まわりのビルに施設を借りていて、お金を払って床を借りていた。今回はそれをまとめて、港のほうに近いところに建て替えた。跡地をどうするかが大問題で、市役所の建物自身が、村野東吾の建物で、皆さんの親しみが深い。まずその形を残せないかという議論があった。でももし市役所が移っちゃうと人が消えていくわけだから、逆に何か埋めてくれないと、周辺の商業あるいは周辺の不動産価値がどんどん下がって困るというので、民間のジョイントのプロジェクトをプロポーザルで選んで、という形になっている。同時に、その市役所の敷地の脇のところは、前々から再開発の話があった。民間が独自におやりになるという世界で、市役所跡地のプロジェクトを選定する際に、その隣接部のところをどう取り扱うかという議論があった。同じようなプロジェクトだから、二つ一緒になって本来やってもらったらいいんじゃないかという議論もあったが、一方のほうは民間なので、まとまりにやはり少し時間がかかる。結果的には市役所のほうの跡地を先に、大手デベロッパーが中心になったグループがとった。一方、それが動き出した途端に今度は再開発の方は、ここにこんなものできるのであればと火がついて、そこにはまた別のデベロッパーが入って、日本を代表する二つのデベロッパーが競うようにして、その場所に自分たちのノウハウを突っ込んで競争しているという状況にある。一旦こう何か事が動いてその先に少し光が見えてくると、周りでどうしようかなと思っていた方たちの中でも勢いが出るし、その最初のステップが失敗すると、何だこれはというだけで終わってしまう。これは成功する失敗するかはやってみないとわからないところがある。渋谷のまちでもいくつかお手伝いしているが、渋谷の駅の周りに再開発が進んでいる。最初、あんなところで成立するのかという、だいぶ懸念があった。しかし、一つ目、二つ目が出てきて、うまくいくと、今度はものすごく動き出した。ちょっと少し事情が違うところはある。渋谷に関して言うと、IT企業がいる、一定成長していくと床が欲しくなるが、渋谷にはその床を提供する場所がなかった。ですから再開発が進むと、六本木に出ていた企業が戻ってきたりしている。今は、Googleもそうだが、DeNAもいる。IT企業がいっぱい膨らんで入ってきているという状態になって、渋谷のまちの雰囲気も、多分彼らにとっては合っていたと思う。

そういうまちの中で働けるっていうことが今の時代に合っていたので、そのことによって、一発目が無事成功したので、周りが動き出した。でも皆さんはじめは懸念を持っていて、本当にうまくいくのかということについては心配している。そこは良く分からないところがある。上手く行くか行かないかは、でも、そこは民間の知恵も借りながら乗り切るしかないということが大事

なところだと思う。この場所に関しても、どういったものを本当にやってもらえるのか。おそらく民間のヒアリングをされているだろうけれども。皆がやれそうだと思うかどうか、そういうことを思ってくれる人が何人か出るかどうか、というのがポイントだと思う。なかなか出ない場合もある。やってみても民間の人も、ちょっとここじゃ無理だという場合もある。必ずしもいつも成功するわけではない。もしおやりになるならば、幅広に、いろんな方と意見交換されるのがいいと思う。

○田中都市建設局長

本庁舎機能を仮に白川公園に移転した場合の跡地のまちづくりが非常に重要なことは理解している。そこで、白川公園に本庁舎を移転した場合のそちら側のまちづくりというか、駐車場は絶対必要なので、周辺と一緒にして新たなまち・拠点をそこで作った方がいいのか、単純にオフィス機能だけの方がいいのか改めて聞きたい。

■岸井教授

白川公園の方にもし新しい庁舎を建てるのであれば、移転新築になるので、スピード感が重視されているときにはそちらに傾くと思う。そこでまた複雑なことをやると、スピード感をそぐことになる気がする。そこまでスピード感を重視していないのであれば、公共交通機関があまり良くないところにあえて移る必要があるのかという話が出る。駐車場をたくさん作らないといけな、公園を潰さなきゃいけない、ではどうするかという話が出てくる。使い方もある程度制約がかかる気がする。そこは、地元の方との関係なのでよくわからないが。あまり複雑なことをしたくない場合に白川公園の話があるのかなという気はした。

○大西市長

感謝申し上げます。また先生にも相談しながらアドバイスをいただければと思っている。今後も引き続きよろしく願います。

○田中政策局長

以上をもって終了とさせていただきます。岸井先生におかれては、大変ご多忙のところ誠に感謝申し上げます。